

# 「リュシアン・ルーヴェン」小論

島田尚一

## 序論

スタンダールは一八三一年いらい、チヴィタ・ヴェッキア領事の任にあつた。一八三三年休暇でパリに帰つたとき、かれは女友達ジュール・ゴーチエ夫人から、かの女の『中尉』と題する小説の原稿を渡され、それについての助言を求められた。かれはそれを任地へもち帰り、余暇をみては訂正の筆を加えていたが、一八三四年五月四日、ゴーチエ夫人にかなり長文の手紙を書き、懇切な助言をあたえている。その翌日から、かれはみずから教員ばかり書き始めたのであるが、このときには、出来の悪い『中尉』を書き直すという以外、別の意図はなかつたようである。かれがこの『中尉』を利用して、自分の小説を書くとの考えをいだいたのは、同年五月八日から九日にかけての夜中であつたといわれる。

アンリ・マルチノによれば、地方における士官の生活という主題は、それ以前からスタンダールの興味をひいていたもので、すでに『ラシーヌとシェクスピア』の第二部（一八二五）に、それに関する

る記述がみられる。

ゴーチエ夫人の小説を契機に、スタンダールはこの主題を、自身で扱つてみようという気になつたものようだ。こうして、かれの三大小説のひとつ『リュシアン・ルーヴェン』が生れることになつた。

(1) Henri Martineau: L'Oeuvre de Stendhal (Albin Michel, 1951), p. 455.

最初の構想では、この小説は三部から成るはずであつた。まず第一部では、ゴーチエ夫人の小説を利用して、軍職をもつ主人公を登場させ、この主人公の出入りする地方の貴族社会を描く。次に第二部では、主人公は政治の仕事にたずさわり、かれの活躍する中央の政界が描かれる。そして最後の第三部で、スタンダールは、一八三一年に書いた『社会的地位』と題する未完の小説を利用して、外交官の社会を描くつもりだつたのだが、残念ながら、この第三部はついに実現されずに終つた。一八三五年四月二十八日、スタンダールは

第三巻を省くむねのノートを原稿の余白に記し、同年九月二十三日には『リュシアン・ルーヴェン』を放棄して、直ちに『アンリ・ブリュールの生涯』にとりかかった。

スタンダール小説のなかで、『リュシアン・ルーヴェン』は特殊な位置を占めている。あるひとは、この小説をバルザック的だと評するが、たしかにそれも理由なきことではない。それほどこの小説は、一見、『赤と黒』や『バルムの僧院』とは違ったようにみえるのだ。それは主として、この小説における政治や社会の描写が詳細緻密であることからくる。たしかに、この小説の特に第二部では、アランも指摘しているように、政治がほとんど唯一の主題だといつてもいいほどだ。しかし、政治的社会的性格は、『アルマンズ』から『ラミエル』にいたるまで、スタンダール小説が多かれ少なかれもつてゐる性格なのであつて、これを抜きにしては、スタンダール小説の正当な評価は不可能だとさえいえよう。ただ、『リュシアン・ルーヴェン』では、この性格がもつとも前面に押し出されていることは事実だ。

- (1) Alain : *Stendhal* (Presses Universitaires de France, 1948), p. 120.

ここで注意すべきは、スタンダール小説における、政治ないし社会描写のもつ特殊な性格である。ゲオルグ・ルカーチは、スタンダールが、時代の本質的特徴を主人公の伝記のなかに詰めこむという点を指摘している。<sup>1</sup> そもいえるが、わたしはむしろ次のようにいいたい。スタンダールは政治や社会を、ベイリスムの体現者たる主

人公の生き方に鋭く対立するものとして、いいかえれば、主人公の『幸福追求』に対して否定的にあらわれるものとして、描き出すのだ、と。かれは、バルザックふうの典型ではないエリット、すなわち精神貴族を、主人公としてえらび、その主人公の眼で社会の諸相をみている。従つてスタンダール小説における社会は、常に、ベイリスムの立場から批判された社会である。同時代の社会を描くスタンダールの態度は、常にイロニクなのだ。やや図式的にいえば、スタンダールの場合、主人公がそのなかで生きる社会は、いつもコミックなものとして設定され、このコミックな状況のなかで演じられる『美しい魂』の悲劇が、小説の根本的な主題となる。バルザック的と評される『リュシアン・ルーヴェン』においても、この事情に変わりはない。

- (1) Georg Luckács : *Studies in European Realism* (London, Hillway Publishing Co., 1950) p. 72.

以上のような観点に立つて、わたしは以下『リュシアン・ルーヴェン』を論じてみたい。

一

『赤と黒』や『バルムの僧院』の場合と違つて、製作年代的にはこの両者の中間に位置する『リュシアン・ルーヴェン』には、かなりの分量の創作ノートが残つてゐる (*Mélanges intimes et Marginalia*, t. 2, Ed. Divan)。これをみると、スタンダールがこの小説を前作『赤と黒』とはよほど違つた方法で書こうとし、かれ自身が『赤と黒』の欠点と考へていたいくつかの点を、改めようと努めたこと

が分るのだが、この欠点のひとつに、『赤と黒』では話の興味もつばら主人公に集中していて、背景の副人物の描き方が足りないという点がある。「すべての退屈で第二義的な人物の肉体的肖像を作ること。わたしは『ジュリアン』で、クロワズノワ、ド・リュース、ド・ケリュースなどについて、それに失敗した。」(『ジュリアン』とは、スタンダールが最初『赤と黒』にあたえていた題名である。)もつとも、背景をなす副人物を入念に描こうという意図は、『リュシアン・ルーヴェン』において初めてみられるものではなく、前記『社会的地位』のノートに、すでに次のような言葉がある。「この小説もまた、『赤と黒』のように、二人物間の決斗 (duel entre deux personnages) になるだろうか。否。決斗の物語が終つたら、背景の人物 (peuple du tableau) を作ること。」

(1) op. cit., p. 208.

(2) Mélanges de Littérature, t. 1, p. 143 (Ed. Divan)

以上のことから判断すると、小説の背景を構成する副人物を、『赤と黒』におけるようにスケッチふう、カリカチュアふうにはなく、より克明に描こうというのが、当時のスタンダールの、いわば固定観念であつたと考えられる。

では、『リュシアン・ルーヴェン』において、その背景をなす七月王政下の社会はいかに描かれていたのだろうか。『リュシアン・ルーヴェン』のノートは、この小説の物語が一八三三年から三五年にかけて経過することを示しているが、フランス史においてこの時期に政権を担当していたのはド・ブロイ公 (duc de Broglie) の内閣であるから、われわれは、『リュシアン・ルーヴェン』の歴史的背景

が、正確にはブロイ内閣時代の社会だと考えていいわけである。もつとも、スタンダール自身は、それと名指してはいない。(アラゴンのいうように、《caractère daté》はスタンダール小説の重要な特徴であるから、こういう細かいせんなくも決して無意味ではない)

(1) op. cit., pp. 253-254 et pp. 262-263

(2) Voir, Louis Aragon : La Lumière de Stendhal (Ed. De-noël, 1954)

ド・ブロイ内閣は、カシミール・ペリエ (Casimir Périer) の内閣のあとを受けて、一八三三年から三六年にかけて政権を相当した。首班のド・ブロイ公は外相をまかね、内相チエール (Thiers) 文相ギゾー (Guizot) などいづれも《doctrinaire》たちが、この内閣を構成していた。周知のごとく、七月王政期の政治勢力は三つに大別される。右には正統王朝派、左には共和派、そしてその中間にいわゆる中庸派 (juste-milieu) があつた。ペリエ、ド・ブロイ、チエール、ギゾーなどはいずれも中庸派に属し、その政治的イデオロギーは自由主義的な君主主義であつた。この派もしかし、内部では保守派と革新派に分れ、それぞれ《抵抗派》(partisans de résistance)、『運動派』(partisans de mouvement) と呼ばれた。前記《doctrinaire》たちは、いずれも前者に属した。ラ・ファイエット、ラフイット、オディロン・バロなどの《運動派》が政権を担当したのは七月革命の直後だけで、そのあとはペリエからギゾーにいたるまで七月王政期全体を通じて権力の座にあつたのは、少数上層ブルジョアジーの利益を代表する《抵抗派》であつた。ド・ブロイ内閣時代を歴史的背景とする『リュシアン・ルーヴェン』が、同時に七月王政

そのものの本質的性格をとらえ得たゆえんである。

では、七月王政の本質的性格とは何か。七月王政は、別名ブルジョア王政ともいわれるように、王政とはいえブルジョアの性格の強いもので、上層ブルジョアが貴族や僧侶の手から実質的な権力を奪取した時期である。ここで注意すべきは、上層ブルジョアが、権力の座につくやいなや、それまでの進歩的、革命的役割を放棄して急速に反動化し、権力奪取に大きな役割を果した大多数人民階級の依然たる窮乏に無関心であるばかりか、かえつてこれを積極的に断崖し始めたことである。この後者の利益を代表する共和派は、一八三四年には人権の会(Société des Droits de l'Homme)を組織して闘い、しばしば暴動を指導するが、政府は、(結社に関する法)(一八三四年三月)や(出版に関する法)(一八三五年九月)などをもつて、これを断崖した。そして、この目的のためには、かつての敵、正統王朝派や、とりわけ僧侶階級と結ぶことをも辞さなかつた。共和派の暴動におそれなした上層ブルジョアは、宗教をいわばひとつの社会的ブレーキとして利用したのである。

小説『リュシアン・ルヴエン』において、この上層ブルジョアを代表する人物は、いうまでもなく、大銀行家ルヴエン氏である。(ただし、この人物を、この時期の銀行家の典型ということはできないだろう。そういう社会的な意味よりも、スタンダールの思想のある面を代表しているという点で、精神的な意味をより多くもっている人物である。従つて、かれが、いわゆる「退屈で第二義的な人物」のひとりでないこと、いうまでもない。しかしここでは、一応、上層ブルジョアの代表者としての面だけを取扱う。)かれは、ほとんど行くところ可ならざるなき勢力の持主である。かれは政治

に大して興味はもつていないが、その巨大な財力によつて、政治を思いのままに操ることができる。かれは大臣たちを少しもおそれていない。国王ルイ・フィリップをさえおそれていない。国王との会見における、かれの悠揚迫らざる態度をみよ(第60章)。こういう態度がとれるのも、次のような自信に支えられているからだ。グランデ夫人(小説の第二部でリュシアンに恋する人妻)に、かれはいう。「グランデ氏もわたし同様、銀行を牛耳つておられる。そして七月革命いらい、銀行は国家を牛耳つています。ブルジョアがフォーブール・サン・ジェルマンにとつて代つたわけで、銀行はブルジョア階級の貴族なのです。(中略)政府は、株式取引所を上手にあしらふことに最大の関心をもっています。内閣が取引所を潰すことはできないが、取所は内閣を潰すことができますのです。」(第63章)事実かれは、小説の終りの方で、その財力と才智に物をいわせて、(Léon du Midi)と称するグループを作つて議會に君臨し、政府のある閣僚が息子リュシアンを侮辱したというだけの理由で、その政府を危機に追いやることのできたのだ。

さて、主人公リュシアンが政府軍の士官として赴くナンシーの政治情勢であるが、ここでも正統王朝派、中庸派、共和派の鼎立がみられる。もつとも、ここでは、与党たる中庸派の勢力は弱く、知事フレロンや政府軍の士官たちは、一方で貴族の社交界から閉め出され、他方、共和派にも手をやいてる。歴史書によると、ナンシーは、マルセーユやリヨンなどとともに、共和派の勢力の強かつた都市らしいが、小説では、測量技師で新聞(夜明け)の編集者ゴーチエ氏を中心とする若い共和主義者たちが、中庸派の役人や政府軍の軍人をなやます様子が描かれている。

しかし、スタンダールが小説の第一部で特に描こうと意図したのは、創作ノット中の言葉を使えば《Henriquinquime en province》、すなわち、地方における正統王朝派貴族の社会である。この派の首領は、ド・ジャステレル夫人（リュシアン（リュシアン）の恋人）の父ド・ポネルヴェ氏とド・ヴァシニエ氏で、これを中心にロレル兄弟、ド・ジュヌヴレ伯、ド・サンレアル侯などがいる。その他に、アランが「スタンダールの最良の肖像のひとつ」と評した医師デュ・ポワリエがいる。かれはシャルル十世党委員会の秘書だが、出身は下層階級である。醜く、粗野で、グロテスクでさえあるが、才能があり、雄弁で、精神的で、ナンシーの政治を思いのままに操る人物で、小説の終りでは代議士にまでなる。有能な下層階級出身者のアリヴィスムを代表する人物といえよう。小説の進行につれて、リュシアン（リュシアン）の出入りする貴族のサロンが、次々に描かれて行く。ド・ピュイローラン夫人、ド・セルピエール夫人、ド・コメルシー夫人、ドカンクール夫人などのサロンが。

(1) *op. cit.*, p. 215.

(2) *Alain, op. cit.*, p. 45.

小説の第二部は、リュシアンが内務大臣ド・ヴェーズ伯の秘書として活躍する中央政界の描写にあてられている。それは、株式取引所のいわば奴隷でしかない中庸派政府に対する諷刺である。

リュシアンは、まず、コルティス事件なるものの調停に乗り出す（これは、一八三四年にリヨンで現実についた事件をとり入れたもの）。この小説には、その他にも政治的アリヴィジョンが非常に多い。「この作品は、いささかもアリヴィジョンを求めず、むし

ろそのいくつかを避けようと努めながら、邪気なく単純に作られている」という第一の序文の言葉は、官憲をおそれての例のミステイフィクションにすぎない。それらしいリュシアンは、新しい職務に完全に満足というわけではないが、まずまず勤勉に働く。そして、かれの官吏生活を通じて、政界の内部が次第にあきらかにされてゆく。リュシアンは請願委員として、シャンパニエとカンに選挙干渉に赴くことになるが、出発にさいしてド・ヴェーズがかれにあたえた助言は、共和派断崖のために貴族や僧侶と容易に結びつく中庸派政府の反動性を、いかに示している。「貴族や僧侶には適当にやりなさい。かれらとわしらは、お互いに小供じみたことばかりやつているのだから。共和派には一切容赦はいらぬ。」（第49章）リュシアンは、プロワで民衆に泥をぶつけられて少しひるみながらも、この助言に従って行動する。しかし、シャンパニエではことはいまぐれ運んだが、カンではかれは窮地に陥る。共和派の候補者ド・メロベール氏の当選を妨害するために、かれはドニ・デイスジョンヴァル師を通じて、正統王朝派の候補者ル・カニエを買収するのだが、この試みは結局失敗に終る。ド・メロベール氏の当選に熱狂する民衆をみて、かれは、「あれこそ本当に主権をとつた民衆だ」と呟かざるを得ないのである（第54章）。

この章のはじめに、スタンダールが『リュシアン・ルーヴェン』において、いわゆる《*peuple du tabeau*》を描こうと努力したと書いたが、たしかにこの小説には、主人公の内面生活の発展に直接関係のない副人物は、その数も多く、また、たとえば『赤と黒』に比べると、より入念に描かれてもいる。さきに名前をあげたナンシーの貴族たち、中庸派の閣僚たち（ド・ヴェーズ、ド・ポーン

ブル)、三人の知事(フレロン、リクブール、ブーコー・ド・セラン  
ヴィル)などがその主なものであるが、これら副人物の演ずる役割  
のひとつは、ジャン・プレヴォもいうように、一八三五年のフラン  
ス社会を描くことである。

(1) Jean Prévost : La Création chez Stendhal (Mercure de  
France, 1951), p. 297.

かくて『リュシアン・ルーヴェン』は、七月王政下フランス上層  
社会の巨大なパノラマとなつた。『赤と黒』の例にならつて、われ  
われはこれを一八三五年年代記と呼ぶこともできるであらう。モー  
リス・バルデシユはこの小説を「七月王政に関する一種の小説化さ  
れたルポルタル、ジュ」と評しているが、選挙その他多くのアクチュ  
アルな事件をとり入れた『リュシアン・ルーヴェン』に応わしい評  
語といわねばならぬ。

(1) Maurice Bardeche : Stendhal Romancier (Ed. de la Table  
ronde, 1950), p. 259

(二)

前章においてわれわれは、『リュシアン・ルーヴェン』が七月王  
政下のフランス社会をいかに描いているかを見た。そして、スタン  
ダールの『*Le peuple du tableau*』を描こうとの意図が、ある程度  
まで成功しているのを見た。しかしそれは、あくまである程度まで  
であつて、完全にはいえないのである。バルザックの社会描写と  
比較すれば、このことはおのずから明瞭であらう。少数の例外を除  
いて、『*Le peuple du tableau*』は、ここにおいても、多少ともコミ

ックな戯面にとどまつている。スタンダール自身もそのことに気付  
いていたようだ。創作ノートに、次のような言葉がみられる。「興  
味が、すべての人物によつて育てられないで、リュシアンの上にた  
けある。」<sup>1)</sup>また、「このフランは、相変らず『*Le duo*』で、『*Le septuor*』  
がない」という欠点をもつている。<sup>2)</sup>『*Le duo*』が前記『*Le duel entre  
deux personnages*』に、『*Le septuor*』が『*Le peuple du tableau*』に  
それぞれ対応するものであること、いうまでもない。さらにスタン  
ダールは、同じく創作ノートのなかで、自らを十八世紀の英国作家  
ヘンリー・フィールディングに比べて、次のように書いている。「フ  
ィールドイニングとドミニック(スタンダールのこと——筆者)の大  
きな相違は、フィールディングが同時に数人の人物を描き、ドミニ  
ックがただ一人物をしか描かない、ということだ。」

- (1) op. cit., p. 211.
- (2) ibid., p. 215.
- (3) ibid., pp. 230-231.

序論で触れたルカーチの指摘とも関係する、この主人公中心主義  
とでもいうべき傾向は、スタンダールの文学的資質に深く根ざした  
ものなのだが、今この点を詳しく考察する余裕はない。ただ、スタ  
ンダール初期の著作『*Filosophie nova*』のなかに、そういう傾向を  
定式化した言葉が二、三みられることを指摘するとどめておく。  
(むろん、この著作は演劇論ではあるが、スタンダールが小説を十八  
九世紀の喜劇と考えていたことは、周知の事実である。)  
さて、『リュシアン・ルーヴェン』の主人公はいかなる青年であ  
らうか。また、第一章でみたように設定された社会のなかで、かれ

はいかなる生き方をするだろうか。一言にしていえば、かれは、あらゆるものに恵まれた幸福な若者である。下層階級出身のジュリアンと違つて、大銀行家を父にもつリュシアンは、生活のために働く必要はない。ジュリアンの父は息子を憎んだが、リュシアンは父に心から愛されている。そして、リュシアンは、ジュリアンに欠けていた優雅な物腰がある。……かれに欠けていた唯一のものは、経験であつた。そしてこの経験の代りにかれがもつていたものは、小説中の言葉を使えば《maladie du trop raisonner》である。ここに、なによりもまず天真らんまんな行動家であるファブリスとの相違がある。ジュリアンも強烈な自意識家であるが、かれのもつエネルジー(スタンダールによれば、それは「真の必要のために斗つている階級」<sup>1</sup>にしかみられぬものだ。)が、時として、かれに向う見ずな行動をさせる。それがリュシアンにはない。

(1) Vie de Henry Brulard, chap 2, p. 21 (Ed. Classiques Garnier)

スタンダール小説の主人公たちのなかでリュシアンに最もよく似ているのは、『アルマンス』の主人公オクターヴ・ド・マリヴェールだ、とわたしは思う。まず、二人とも良家の息子である。オクターヴは由緒ある家柄の貴族だし、リュシアンはブルジョア社会の特権階級たる大銀行家の息子だ。次に、この二人はいずれもエコール・ポリテクニクの出身である。(もつとも、リュシアンは学業半ばにして放校されたが。)このことは、かれらが合理的、進歩的な啓蒙思想に培われていることを意味する。オクターヴの憂愁は、単に性的不能に起因するのみならず、より以上に、自分の属する貴族階級が、

王政復古期には形式上は権力の座にあつても、歴史的必然によつておそかれはやかれ亡ぶべき運命にあることを知つてのことからくる。リュシアンはといえば、實質的に権力の座にある階級に属してはいるが、かれはそのことを誇らしく思つていどころではない。なぜなら、かれは、潜在的な力をもつていゝる人民を圧迫するこの階級の反動性を、よく知つていゝるからである。

ところで、このなに不足ないリュシアンが、自ら求めて職についたのはなぜか。ジャン・プレヴォは、『赤と黒』がエネルジーのモラルを展開したのに対して、『リュシアン・ルーヴェン』は良心のモラルを展開する、と正しく指摘し、「自らを尊敬するためには何をなすべきか。これがこの本の問題である。じつさい、これが、なに不足ない人間に課せられる真の倫理的問題なのだ。」と書いていゝる。<sup>1</sup>望みさえすれば両親の傍で贅沢に暮せるリュシアンが、自ら求めて、退屈な地方都市ナンシーに一士官として赴くのは、まさにこの「良心のモラル」ゆゑである。かれは、「自らを尊敬するためには」何よりもまず、自分の力で生活をたてねばならぬ、と考えるのだ。軍職をえらんだのは、単に軍服が気に入つたからにすぎない。

(1) Jean Prévost, op. cit., p. 295.

ナンシーに着いたリュシアンのもとに、二通の手紙がとどく。一つは脅迫状で、これが、町の醜きによつて生じたかれの不機嫌を倍加するが、共和主義者の手になる他の手紙は、「第一の手紙が激しくひき起した卑劣とか醜悪といった感じをほとんど消し去つた。」(第6章)エコール・ポリテクニクで教育を受けたリュシアンが、共和主義者に好感をもつのは当然である。かれは、共和主義者の主

張が極めて正しいことを認める。「ぼくは、かれらの意見には尊敬を払っている。かれらの野心は誠実なものだ。」(同)かれは、共和主義者がそのために斗つている民衆の、増大する力を感じてさえる。にもかかわらず、かれ自身が共和主義になれるのはなぜか。「いかに有徳であつても、気の利いた考えをもつことのできない連中とは、ぼくは一緒に暮せない。ぼくは、墮落した官廷の優雅な風習の方が百倍も好きだ。ワシントンにはぼくを死ぬほど退屈させるだろう。ド・タレーラン氏と同じサロンにいる方がよほどいい。尊重の感覚がぼくにとつてすべてではないのだ。ぼくには、旧文化の生んだ快楽が必要なんだ。」(同)「民主主義は、ぼくの感じ方にはあまりきつすぎる。」(同)

リュシアンにおける、この思想と感性の乖離は、同時にスタンダール自身のものであつた。周知のごとく、若年にイデオログ々たちの影響を受けたスタンダールは、ブルボンとその同盟者を極度に憎み、大革命を高く評価した。かれは民衆の幸福を熱望し、進歩の観点から、当時の社会の諸矛盾を批判した。要するに、かれは、思想的には共和主義者であつた。しかし、この面のみを誇張して考へてはならない。すでにエミール・ファゲが指摘したように、スタンダールの急進的な政治思想と極度にデリケートな感性との間には、明白な乖離があることを見逃してはならぬ。『アンリ・ブリュエールの生涯』中の次のような言葉は、それを証明するものだ。「わたしは民衆を愛し、その圧制者たちを憎むが、民衆と一緒に生活することは、わたしにとつて絶えざる苦痛であらう。」(第15章)「わたしはかつて、もつとも貴族的な趣味をもつていたし、現在なおもつてゐる。わたしは民衆の幸福のためにはなんでもするだろうが、商店

のひとつと一緒には暮すくらないなら、毎月十五日間を牢獄で過す方がましだろうと思ふ。」(第27章)スタンダールは、この「貴族的な趣味」を両親から受け継いだものとし、「わたしは不潔なものを嫌う。そして、民衆は、わたしの眼にはいつも不潔に見える。」(第14章)と書いているが、とにかく、かれが民衆の粗野、その「野卑な凡庸さ」を嫌悪していたことはあきらかである。この嫌悪ゆえに、かれは共和派に積極的に参加することができなかったのだ。クラッチは、スタンダールの政治思想を「逆説的共和主義」と呼んでいるが、面白い表現だと思ふ。

(1) Emile Faguet: *Poliques et Moralistes du dix-neuvième siècle*, 3e série, p. 32.

(2) *La Comédie est impossible en 1836, Mélanges de Littérature*, t. 2, p. 441 (Ed. Divan)

(3) J.W. Krutch: *Five Masters* (Jonathan Cape, London), p. 189.

スタンダールのアメリカ嫌い、デモクラシー嫌いの原因も、このあたりにある。『一漫遊者の覚書』のなかで、選挙に関連してかれは書いている。「選挙が行われるようになれば(それはフランスではやつと今年始つたばかりだが)、アメリカにおけるように最下層階級の御機嫌をとらねばならなくなるのだろうか……そうなければ、わたしは直ちに貴族になる。わたしは誰の御機嫌もとりにたくないが、同じ御機嫌をとるなら、民衆よりも大臣の方がまだましだ。」エゴチスト・スタンダールの面目躍如たるものがあるではないか。かれは共和主義者でも民主主義者でもない。かれの政治に対する態度



は、マクシム・ルロツの言葉を借りれば「政治的懷疑主義」に他ならぬのである。

(1) *Mémoires d'un Touriste, Fontainebleau, le 10 avril 1837.*

(Ed. Champion, t. 1, p. 20)

(2) *Maximé Leroy : Stendhal Politique (Le Divan, 1929), p.*

35.

マーチン・ターネルは、十九世紀になつていゝゆるパトロンが消滅した結果、社会的に孤立した作家が、その孤立から自らを救うために、「新しい知的貴族」をうちたてようとしたことを指摘し、スタンダールの《*a happy few*》の意味をここに求めている。スタンダールが『産業家に対する新陰謀について』という文章のなかで、「考える階級」という言葉を使つてゐることを、ここで想起しよう。この文章は、産業家のあまりにも功利的な考え方を非難し、利害をはなれた高貴な感情を擁護したもので、ここでスタンダールは「考える階級」を、貴族と産業主義に対立させてゐるのであるが、わたしは、この「考える階級」を、ターネルの「新しい知的貴族」と同一のものと考えていいのではないかと思う。この階級は、政治に關して発言はするけれども、政治的な力は少しもなく、むしろ政治の外に存在する。この階級の代表者たるスタンダールは、政治という名の卑劣と奸計に満ちた世界に参加することを拒み、政治を超えたところにこそ幸福を求めるのである。ここに、かれの《幸福追求》、*エピキュリスム*、*エゴチスム*の眞の意味がある。

(1) *Martin Turrell : The Novel in France (Hamish Hamilton,*

1950), pp. 132-133.

リュシアンもスタンダール自身と同じく、金持たちの矚着を心から憎みながらも、その優雅な風習を愛さずにはおれず、他方、共和主義者たちの美徳を賞識しながらも、その粗野を嫌わずにはおれない。ゴーチエ氏の誠実さに対する讚美も、かれを共和主義者にすることはできないのである。ゴーチエ氏の共和主義的議論を聞きながら、次のように思わざるを得ないリュシアンなのだ。「ぼくはかれを深く尊敬しているにもかかわらず、睡気がさしてくる。それでいて、ぼくは自分を共和主義者だといえるだろうか。このことは、ぼくが共和国で暮すようにはできていないことを示している。共和国なんて、あらゆる凡庸さが幅を利かせているところなのだ。ぼくは、もつとも尊敬すべき連中をさえ、平気で我慢することはできない。ぼくには、ウオルポールやド・タレーラン氏のような、無頼で愉快な首相が必要なんだ。」(第8章)かくてリュシアンはゴーチエ氏から離れ、貴族社会へ接近してゆく。そして、この社会へ入るためには、かれは、信心深いふりをさえあえてするのである。「偽善者の方が共和主義者よりましだ。」(第9章)と考えながら。

恋愛、とりわけ恋する男たちに対する深い軽蔑にもかかわらず、リュシアンはド・シャステレル夫人を恋するようになる。かの女は、まだ若い、美しい未亡人で、高貴な魂の持主である。(ここでは、この恋愛の過程の分析は省略する。ただ、この恋愛描写が、有名なクリスタリザシンの理論の、もつとも見事な適用のひとつであることを指摘するにとどめる。)美しきもの、高貴なるもののために生れてきたこのふたつの魂は、容易に相手を認めあい、理解しあうようになる。「かれはド・シャステレル夫人に対して、おのすから、上品で卒直な話しぶりをしたが、その調子のなかに、相手の最も徹

妙な心理をさえも決して傷つけることなしに、一脈の婉曲な親しさをあらわすことができた。そういう親しきは、ふたつの同じ高さの魂が、いわゆる社交界という、けがらわしい仮面舞踏会の仮面のなかで出あい、認めあつたときに、それらの魂が示すに必わしいものである。なにかの使命で天から降りてきて、偶然下界で出あう天使たちも、このような話し方をするだろう。」(第17章) むろん、ふたりの政治的立場は正反対である。ド・シャステレル夫人は熱心な正統王朝派であり、リュシアンは、さきにもみたように、共和主義者ではないにしても、少くとも自由主義者である。けれども、この高貴な魂たちにとつて、政治的立場の相違も決定的な障碍とはなり得ない。「リュシアンはかの女のために、その自由主義を犠牲にし、かの女はかれのために、その過激王朝主義を犠牲にしていた。この点については、かれらは、ずつと以前から完全に了解しあつていた。」(第32章) (スタンダールにおける幸福が政治を超えたところにあることが、ここにもあらわれている。)

かれらが「シャストール・ヴェール」で宵を過す個所は、この小説のなかでもつとも甘美な、もつとも幸福な部分だ。ここにおいてのみ、かれらは、疑惑やあらゆる卑俗さから解放されて、完全に幸福になることができる。ここにおいてのみ、かれらの情熱恋愛は、完全に開花するのだ。わたしは、「シャストール・ヴェール」が、『赤と黒』や『パルムの僧院』における牢獄のような役割を果していると思うのだが、どうであらうか。

デュ・ポワリエの奸計によつて愛人の許を去り、パリへ帰つた傷心のリュシアンを、ふたつの職業が待っている。父の銀行で働くか、ド・ヴェーズ伯の秘書として官吏になるか。リュシアンの気持が後

者に傾いたとき、ルーヴェン氏はかれにこう質問する。「おまえは、その職をやりとげるほど悪覚になれるかね。」(第38章) (ここで、民衆を搾取し、民衆に武力的断崖をさえ加えていた当時の政府の反動性を想起すべきである。) この言葉をきいて、はじめは身ぶるいしたリュシアンも、結局、「悪覚」になろうと決心する。ただし、次のような条件で。「ぼくは店の方に行こうと決めかけていました。でも、内閣に雇われることにします。ただし、ネー元帥やカロン大佐やフロッテなどのような暗殺には、一切あずからないという条件つきです。ぼくのやることは、金銭上のごまかしくらいです。それから、もひとつ、ぼくは自分自身に確信がないから、一年間だけ働くことにします。」(第39章) かくてリュシアンは中庸派の政界、この「悪覚」の世界へ入つてゆくのである。そして、すでに前章でみたように、かれはここで大いに活躍しさえするのであるが、このことから、かれが当時の反動的な政治権力に積極的に参加したと速断してはならない。かれが政界に入つたのは、もつぱら、父への感謝を示すためで、立身出世をするためではない。かれほど立身出世に無関心な青年はないのである。

政界で目を過すに従つて、この愚劣で凡庸で粗野な世界に対するリュシアンの嫌悪は、募る一方である。この嫌悪からかれの気を紛らせてくれるのは、ド・シャステレル夫人の思い出だけだ。思い出のド・シャステレル夫人は、かれにとつて、この世のもつとも美しきもの、もつとも高貴なるもの、もつとも崇高なるものの権化となる。さまざまの愚劣と粗野のなかにあつて、この高貴な魂に想いをいたすことによつてのみ、リュシアンは人間的な感情をいだくことができるのだ。カンの選挙のあとで、「ぼくのことを見て、ド・

シャステレル夫人に話したら、かの女はなんというだろうか。」(第54章)と自問せざるを得ないリュシアンである。このように、この高貴な女性はかれにとつて、自分の行為の審判者、ジャン・プレヴォの言葉を使えば、「中世において騎士の貴婦人がそうであつたように、名譽と知性に関する、想像上の審判者」とさえなるのである。

(1) Jean Prévost, op. cit., p. 296.

この未完の小説では、このふたりは二度と出あうことはないが、スタンダールのプランでは、かれらは小説の最後で再会することになつていた。それによると、外交官の書記になつたリュシアンは、外交官夫人にいい寄るが、夫人はこれを拒み、リュシアンの職を解く。リュシアンはフォンテーヌブロー附近のある村に身を引くが、そこへド・シャステレル夫人がやつてくる。誤解が解けて、ふたりは結婚する、という具合になつている。かくてリュシアンは、最後には政治的社會から退き、ド・シャステレル夫人との愛の生活のなかに、人生の眞の価値を見出すにいたる。

こうみてくると、リュシアンの對社會態度が、ジュリアンやフアブリスのそれと根底的には同一であることが分るであらう。「すべてスタンダールの主人公たちは、」とルカーチは書いてゐる、「人生から逃避することによつて、かれらの時代の腐敗から自己の精神的、道徳的誠実さを救つてゐる。スタンダールは故意に、絞首台におけるジュリアンの死を白殺の形として描き、フアブリスとリュシアンは、ジュリアンの場合ほど劇的ではなく、悲愴さも少いにしても、同じ方法で人生から退くのである。」この指摘は正しい。スタンダールの主人公たちは、かれらの置かれた時代と境遇によつて、その生

き方にはさまざまのニュアンスはあるが、共通していえることは、かれらが政治的社會に對して、結局エトランジェ、バルデシユの言葉を使えば「証人」にあるいは「旅行者」<sup>2</sup>でしかないということだ。かれらはすべて、最後には、自分の求める幸福がこの社會にはないと悟り、さまざまな形で社會から退くことによつて、当時の社會の惡から自己の魂の純粹さを守るのである。スタンダールは、かれの主人公たちに社會惡への共犯を拒否させるといふ形で、同時代の社會の愚劣さを批判したといえよう。

(1) Georg Luckács, op. cit., p. 72.

(2) Maurice Bardeche, op. cit., p. 245.